

都市公園のプレーパークにおけるリスクを含む遊びの創出と管理に関する研究

都市公園	プレーパーク	リスクを含む遊び
遊び場創出	世田谷プレーパーク	西東京プレーパーク

都市空間生成研究室
2241096 中島 伊吹耀

1. 研究の目的と背景

近年、都市公園では安全志向の高まりにより遊具の撤去や使用制限が進み、子どもが自由に遊ぶ機会が減少している。一方、「自分の責任で自由に遊ぶ」を理念とするプレーパークは、一定のリスクを含む遊びを通して子どもの主体性を育む場として注目されている。しかし、都市公園という公的空間では、安全管理や責任の所在といった制約から、その継続的な実践は容易ではない。そこで本研究は、世田谷プレーパークと西東京プレーパークキャラバンを対象に、リスクを含む遊びがどのような管理のもとで成立しているのかを明らかにし、都市公園における遊び環境整備のあり方について検討することを目的とする。

2. 調査対象とプレーパークの概要

本研究の対象としたプレーパークは、都市部の公園内に設置された常設型プレーパーク（世田谷プレーパーク）と、移動型プレーパーク（西東京プレーパークキャラバン）の二拠点である。

世田谷プレーパークは、世田谷区内の都市公園に設置された常設型の遊び場であり、子どもが主体的に遊べる遊具や自然素材、道具が日常的に提供されている。スタッフは遊びに対して最小限の介入を行い、子どもの自由な挑戦を尊重する運営がなされている。また、予測可能で学習可能な危険（リスク）は受容しつつ、重大事故につながる危険（ハザード）は除去することで、安全性を確保している点が特徴である。

一方、西東京プレーパークキャラバンは、地域ごとの公園や広場に出向いて開催される移動型のプレーパークである。竹や段ボールなどの素材を用いた遊び道具を子ども自身が作り、試す過程を重視しており、主体的な遊びの創出が促されている。スタッフは地域や参加者の状況に応じて介入の度合いを柔軟に調整し、子どもの挑戦を支える役割を担っている。

両拠点に共通して、自由でリスクを含む遊びを尊重しながら、安全確保を前提に、スタッフの関与を抑えた子ども主体の遊び環境が形成されている。

3. 対象地の空間分析

3-1. 調査の目的と方法

本研究では、都市部のプレーパークにおいて、どの程度リスクを含む遊び環境が保持され、どの程度排除されているかを明らかにすることを目的として空間分析を行った。具体的には、以下の視点で分析を行った。

- 遊具や遊び道具の種類・配置：子どもが挑戦的な活動を行える環境が整っているか。
- 遊具間の距離や地面の材質：転倒や衝突の危険が適度に管理されつつ、自由な動きが可能か。
- リスクの受容度：予測可能な危険（リスク）が残されているか、重大事故に繋がる危険（ハザード）が除去されているか。

3-2. 調査の結果

世田谷プレーパーク（常設型）と西東京プレーパークキャラバン（移動型）を対象に、遊具や道具の配置、安全管理の状況を評価した。世田谷プレーパークでは、固定された遊具や遊び道具により、子どもが自己判断で挑戦できるリスクが保持され、スタッフ介入も最小限に抑えられていた。一方、西東京プレーパークでは、移動型かつイベント型の設置のため、リスクは制限されやすく、自由な挑戦の機会は比較的少なかった。これにより、プレーパークの設置形態や運営方針が、子どもの挑戦的遊びの実現とリスク管理のバランスに影響することが示された。

4. 利用者調査

4-1. 調査の目的と方法

本調査は、世田谷プレーパークおよび西東京プレーパークキャラバンにおける、子どもの遊びとリスクに対する保護者の意識を把握することを目的として実施した。アンケート調査は、各拠点を利用する保護者 102 人および利用者 137 人（未就学児・小学生）を対象に行い、子どもが参加している遊びの内容、リスクを含む遊びへの理解や受容度、子どもの自主性に対する期待、安全管理に対する考え方などに関する設問を設定した。回答形式は選択式と自由記述を併用し、数量的傾向と保護者の具体的

意見の両面から分析を行った。

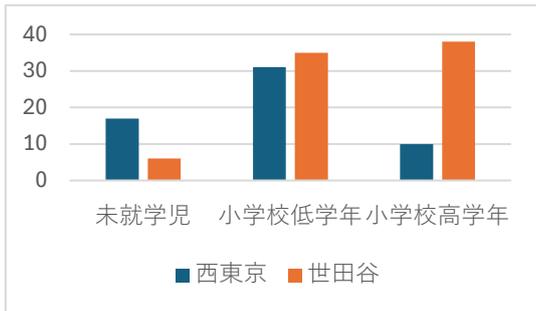


図1 年齢別プレーパーク参加人数（青：西東京、オレンジ：世田谷）

4-2. 調査結果

世田谷プレーパークでは高所登りや水遊び、工具や火を使う遊びなどリスクのある活動に対し保護者の安全意識が高く、注意深く見守る傾向が強いのにに対し、西東京プレーパークキャラバンでは遊びエリアが限定されることやスタッフのサポートがあることで保護者が安心して子どもの挑戦を見守り、過度な介入をせずに自由な遊びや試行錯誤を許容する傾向が見られた。



図2 プレーパークへの保護者の評価（世田谷（左）、西東京（右））

5. リスク管理調査

5-1. 調査方法

本調査は、プレーパークにおける子どもの遊びに対して、スタッフがどのようにリスクを管理し、介入の判断を行っているかを明らかにすることを目的とした。対象は世田谷プレーパークと西東京プレーパークキャラバンである。

調査方法として、以下の2つを実施した。

1, ヒアリング：各拠点で活動するスタッフに対して、リスク判断の基準や介入の方針、日常的な対応の工夫について半構造化インタビューを実施。

2, 参観加入：調査者がスタッフとして現場に一定期間参加し、実際の遊び場での判断・対応や子どもとの関わり方を観察。

これにより、スタッフの行動と意識を併せて把握し、理論と実践の双方からリスク管理の実態を分析した。

5-2. 調査結果

世田谷プレーパークスタッフは遊具や子どもの様子を観察し、危険度に応じて注意喚起や遊び方の工夫を行いながら、子どもの挑戦を尊重して過剰な制限は避けていた。常設型でリスクのある遊び空間が広く確保されているため、安全と挑戦のバランスを意識した運営がなされていた。

西東京プレーパークキャラバン移動型でエリアが限られるためリスクは少なく、スタッフは遊具の配置や使用方法を調整しながら、必要に応じて声かけや軽いサポートを行っていた。迅速な判断と柔軟な対応が求められる環境であった。

5-3. 考察

調査結果から、スタッフは単なる安全管理者としてではなく、子どもが自由に遊べる環境を支える「環境の調整者」として行動していることが確認された。常設型と移動型ではリスクの残し方や介入の度合いに違いがあり、空間構成がリスク管理の実践に影響していることが示唆された。また、スタッフの判断はマニュアル化されておらず、現場経験や観察力に基づく個別判断が中心であることから、運営者の経験や研修がリスク管理の質を左右する重要な要素であることが明らかとなった。

6. 結論

本研究は、都市公園におけるプレーパーク実践を対象に、リスクを含む遊びがどのような管理のもとで成立しているのかを明らかにすることを目的とした。世田谷プレーパーク（常設型）と西東京プレーパークキャラバン（移動型）を比較分析し、運営形態や空間条件の違いがリスク管理に与える影響を検討した。その結果、両事例に共通して、リスクを排除するのではなく、子どもの成長に必要な要素として現場で調整しながら引き受ける管理思想が確認された。一方で、常設型では経験が蓄積され空間更新へとつながる長期的な管理が行われているのに対し、移動型では活動ごとに完結する限定的な管理が中心であることが明らかとなった。これらより、都市公園におけるプレーパークのリスク管理は、空間条件と運営形態に応じて多様な構造を持つことが示された。

参考文献

- 1) 福井 彩水・田中 枝里子・浅井 広巳・中島 誠 (2021)「子どもが自分の責任で遊ぶプレーパークの社会実験に関する報告」、『都市計画報告集』、20 巻、1 号、pp. 48-49
- 2) 荻須 隆雄 (2001)「都市公園・児童遊園等公共の遊び場における事故防止対策の現状と課題」、『安全教育学研究』、1 巻、1 号、pp. 87-96
- 3) 高橋 隆 (2003)「冒険遊び場における子どもの自由な遊びの意義」、『日本建築学会計画系論文集』、67 巻、号 560